




恥辱凌辱
女騎士



カサル公国の女騎士団長ルアンヌは現在、敵軍に捕らえられていた。
ルアンヌは冷たい石牢の中で、先の戦場を回想する。

戦のはじめは優勢だった。

丘から駆け下りたルアンヌ率いる軍は敵を散々に討ち果たす。

ルアンヌは勝利を確信する。

大公率いる軍が敵を挟撃する手はずなのだ。

ところがいつまでたっても大公軍はやってこない。やがて人数で劣るルアンヌ軍は徐々に押され始める。ルアンヌはギリギリまで待った。

それでも援軍は現れない。やむなく撤退指示を出す。

判断が遅れたため撤退は困難を極めた。

殿を務め、隘路にて敵に立ちふさがり、

11人を斬り倒したところで敵に捕らえられた。

しかし、時間は十分に稼げたはずだ。

今頃仲間たちは安全圏まで脱出していることだろう。

ルアンヌはそつとほくそ笑む。

大公軍が現れなかったことに疑問はあるが、

心の中は穏やかだった。

石畳を靴底が打つ音が聞こえる。
誰かやってきたようだ。

「いい様だな、俺の部下を散々殺しやがって」
牢に現れたのは筋骨隆々の大男、敵軍の大將ギスランだ。

「もう少し丁重に扱ってもらいたいんだがな。
こうも拘束する必要があるか？」

丸腰の女相手に」

「ふん」

皮肉を言ってみたが、特に怒りもせず一笑に付される。

「敵軍の豚を人間扱いするつもりはない」


「なんだと！」

なっ？

何をするっ!？」

ギスランはつかつかと歩み寄りルアンヌの胸ぐらをつかんだ。
そして…





ギスランはルアンヌの服を紙のように引き破った。
ルアンヌのたわわな胸が露出する。

「立場をわきまえることだな」

「くっ！」

ある程度辱めを受けることは覚悟していたがやはり悔しい。

恥辱を受け、動揺した心を隠すように
必死でギスランを睨みつけるが、

そんなことなどどうでもいらいようと話題を変えられる。

「貴様に聞きたいことがある」

「…なんだ？」

「若の周りを鼠がうろろうろしていな。

捕えたので貴様が知っているか聞きたいんだ」

「豚の次は鼠か」

「おい、連れてこい！」

兵に引きたてられ小柄な少女が現れた。

ルアンヌはその顔に見覚えがある。

いや、見覚えがあるどころか…。

「クロエツ!!」

「お姉さまっ!」

「なぜこんなところに!!」

「近くの街まで来ていたの。」

それでお姉さまが捕まったって聞いてここに…」

しかりつける言葉が回から出かかると、

泥にまみれ切り傷だらけの足と心配そうな表情を見て止めた。

「ほう、貴様の妹か」

ギスランの顔が愉快そうに歪む。

「許嫁の妹だ。」

その子は釈放しろ。

軍の人間ではない」

ギスランは一瞬驚いた後、実に嫌な顔をして笑った。

「貴様にとって大事な人間であることに変わりはないだろう」
そういついつつギスランの手がクロエの胸を鷲掴みにする。

「ひっ!?!」

「やめろっ!!」

ルアンヌはギスランを睨みつける。

しかし、虜の身では無力な行為だ。

ギスランはニタニタと笑いながらクロエの乳房を揉んでいたが、
数回であっさりと手を放す。

「やめてほしいかルアンヌ」

「当然だ!」

「ならばひとつ言うことを聞け」

「…なんだ?」

そういうとギスランは腰ひもに手をかけ、
ズボンを下ろした。

「舐める」

「なっ!」

ルアンヌの目が驚愕に見開かれる。

ルアンヌはギスランのいうことが理解できなかつた。

いや、理解したくなかつたのだ。


「わからんか生娘。

この、俺の股間に

ぶら下がっている肉棒を

舐めると言っているのだ」





ルアンヌの目がギスランの顔と股間を往復する。
ギスランはルアンヌを処女だと決めつけたが
たぶん合っているだろう。

「それを…?」

「舐めろと?」

「そうだ」

「く、臭いぞ!」

「そりゃそうだ。」

水浴びなんて

もう何日もしてないからな」

しばらく両者の間で沈黙が続いた。

やがてルアンヌは顔をうつ向け、

あきらめたように小さな声でこういった。

「…わかった。やろう。」

しかしせめてクロエは別の部屋に連れて行ってくれないか」

「ふん、まあそれぐらいはいいだろう。」

おいっ」

「はっ!」

「お姉さまっ!」

クロエは別室に連れていかれた。

「さあ、この部屋には貴様と俺だけだ」
「くっ！舐めればいいんだろう！」
舐めれば！！

ルアンヌは怒鳴って自分の感情をごまかす。
言うことを聞かなければ
クロエがどういいう目に合うか分からない。



「そうだ。」

「ほれ、ほれっ！」

「ううっ!!」

顔先に突き付けられた肉棒は

鼻が曲がりそうなほど異臭を放っている。



ルアンヌは2、3度ためらった後、

回を開き舌を伸ばした。

「まだ届いてないぞ、ほれ」

「んんっ！」

んんっ



「まだ舐めたとは言わんな。
舌先が触れたただけだ。舌を動かせ」

「……」

舌先の味蕾が刺激され、脳に電気信号が送られる。
目をつぶっているせいで余計にその味が大きく感じられた。

ペロペロ……



「まあ、こんなもんだらう」
「ツハア！ハア…！」

ハア…
ハア…

数回舐めた程度だが、
ルアンヌは戦場でひと暴れしたぐらいの疲労を覚えた。



「しかし本当にでかい乳だな。
乳がでかすぎて鎧が入らないという噂は
本当なのか？」

「……」

その噂は半ば当たっていた。

胸がいまだ成長しているために、

胸甲のサイズが合わず、

調整に出していたところに戦が始まったのだ。

おかげで戦場を胸甲なしで

駆けずり回る羽目になっていた。

「そのままじっとしてる。

お前の乳を使う。

俺が動いてやる」

「な、何をする気だ!? やめるっ!」

ギスランはルアンヌを地べたに押し倒し、
腹へのしかかった。

「重いっ！どけっ！」
「ハハハッ！もつと暴れていいぞ。
その分、刺激になるからな」

ギシッ

ギシッ

ルアンヌが暴れるたび、
乳房が踊るように揺れギスランの肉棒を刺激する。



「や、やめる気持ち悪いっ!!!」
「ふん、刺激は少ないが、
その表情だけでいけそうだ」
ギスランは自らの男根を
ルアンヌの胸部へこすりつける。

ギシッ

ギシッ

生暖かい肉棒が
皮膚を這うおぞましい感覚がルアンヌを襲う。



「ううっ！」

「溜まりに溜まった精液だ！
すぐ出ちまいそうだ!!」

ギスランが強引にのしかかるため、
ルアンヌの肺は圧迫され息がしづらくなっている。

キニッ

キニッ

ガッ
ガッ

そんなことは
お構いなしに
ギスランは腰を振るペースを速めた。



「はっ！出すぞ!!」
「キヤアッ!!」

ムッ

ムッ
ムッ!!

「男の射精を見るのは初めてか？
顔が赤くなっているぞ」
「あ、当たり前だろうっ!!」



「しかし、なかなか肉付きのいい体だな。

今日はここまでにしておこうかと思っていたのだが
もう辛抱できん！」

「なっ!? やっ! やめるっ!!

やめてくれえっ!!」

ギスランは恐ろしい怪力で

ルアンヌの腰布を剥ぎ取る。

腰布はあっさりと引きちぎれ、

ルアンヌの恥部が露わとなった。

「大人しくしろ！
挿れられんだろ!!」
「だ、駄目っ！挿れるなっ！
ああっ!!」

ギョッ

ギョッ

ギスランに器用に
抑え込まれ、
抵抗できなくなるルアンヌ。
ギスランは亀頭を秘所にあてがい、そして…。
ギョッ



「ああ……あ……

うう……」

「ふふふ……

入ったぞ、わかるか？」

一気に奥の奥まで差し込まれ、
茫然自失するルアンヌ。

「ストゥクゥクゥ……」

痛みよりも
穢されたショックのほうが大きかった。



「あう……うあっ！」
「抵抗する気力もないか。
しかし、体のほうは反応するようだな。
中々いい具合だ」



「早く…終わらせる…」

ルアンヌは小さな声でつぶやくように漏らす。
「ふふふ、そう急くな。
たっぷり注いでやるからな」

ユツヤ

ギスランは
わざとゆっくりと動き、
ルアンヌの反応を楽しんだ。

ユツヤ



「ぐっ、そろそろ出そうだ」
「いたい…痛いっ！」

ズ
ニ
ツ

ズ
ニ
ツ

射精が近いようだ。
ギスランの腰の動きが加速する。





「おらっ！受け止める」
「あああああっっ!!」

ジュルル

ジュルルジュルル

「ふふふ、臍から零れるほど注いでやったぞ。
これは確実に孕んだな。
光栄に思え、俺の子が産めることを」

んんん

「誰が…お前なんかの子をつ…!!」



いっくらか気力を取り戻したルアンヌが口を開く。

「はあはあ……これで……」

クロエは解放してくれるんだろうな……?」

「解放? 何を言っている?」

そんな条件だったか?

胸を揉むのをやめるといふ条件だったぞ。

実際その約束はもう守っている」

「そんなんっ! い、いや、そうだったが……!」

私はこれだけのことをしたんだぞ!!」

ルアンヌは涙声で訴える。

ギスランはあごに手を当て思案するようにならう。

「ふん、確かに貴様は大きなものを支払った。

しかし、捕虜の貴様と捕えた俺が取引するのだ。

対等とはいかんだろう。

よし、では新たに取引しよう。

これからひと月の間にいくつかの条件をお前に課す。

お前がそれらに耐え抜けば、あの娘は解放しよう」

「……本当か?」「本当だ」

「クロエに危害は加えないか?」

「あの娘に怪我一つ負わさないことを約束しよう」

「……わかった。どんな責めにも耐えきって見せる……!」

「フフフ……」

数日後、砦の石牢にて。
ルアンヌは鎖につながれたままだ。
しかし…

「ルアンヌちゃん、いる〜？」

遊びに来たよ〜、ギャハハ！」

ギスラン配下の兵の下卑た笑いがこだまする。



「みてみて〜、おちんちんだよ〜」
兵が自らの肉棒を取り出し、
ルアンヌの目の前に突き付ける。
しかし、ルアンヌは無反応だ。
いつものことなのだ。

フッ



「つれねえなあ…。まあいいや」
手淫を始める兵。
牢の中には兵の荒い息遣いだけが聞こえる。

きゅん
きゅん

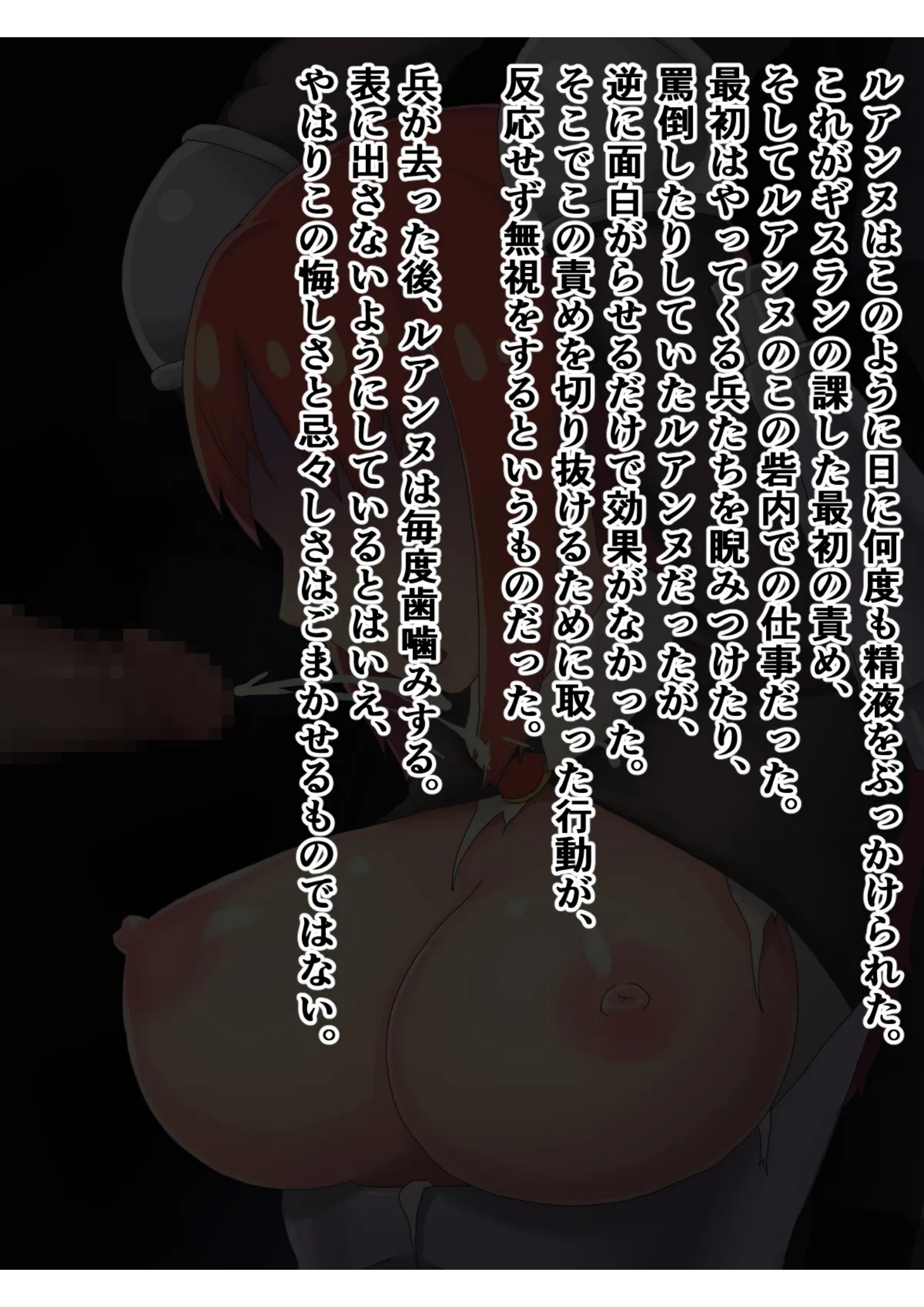


「ぴゅぴゅーとな、へへ！」
発射された白濁液はルアンヌを穢す。
「お触り厳禁とはいえ、
目の前に女体があると捗るな！
また来るからなルアンヌちゃん♡」
そういうと兵は肉棒を仕舞い、
牢を後にした。

ぐんぐん

んんん





ルアンヌはこのように日に何度も精液をぶっかけられた。
これがギスランの課した最初の責め、

そしてルアンヌのこの若内での仕事だった。

最初はやってくる兵たちを睨みつけたり、

罵倒したりしていたルアンヌだったが、

逆に面白がらせるだけで効果がなかった。

そこでこの責めを切り抜けるために取った行動が、

反応せず無視をするというものだった。

兵が去った後、ルアンヌは毎度歯噛みする。

表に出さないようにしているとはいえ、

やはりこの悔しさと忌々しさはごまかせるものではない。

夜。
ルアンヌは現在枷から解放されている。
しかし。

「オラッ！ 這え！」
「ううっ！」

ギスランは乱暴にルアンヌを転がす。
ルアンヌは夜な夜なギスランの慰み者になっていた。
例の契約とは別回だ。



「ふっ、期待に震えてここがヒクヒクしているぞ」

「して…ないっ!」

とりあえず言い返すが

語気が弱弱しい。

連日犯されることで

心はともかく

体が慣れてきて

しまっているのだ。

「ふーむ…」

ただ挿れるだけと

いうのもなあ…

…こっちにするか」

「っ!」

やめるっ!」

ギスランの太い指がルアンヌの肛門に触れる。



「何をしているんだ!」

そこは排泄するところだぞ!」

「前の穴だと

淫乱騎士さんじゃ

ご褒美になっちまうだろ?

だからこっちに

挿れるんだよっ!」

グッ、グッ、

「や、やめっ!」

ぐあっ!!」

ギスランの肉棒がルアンヌの菊門にメリメリと侵入しようとする。

「力を抜け、裂けるぞ」

「いやだっ……!!」

嫌っ!!」

「俺はいいのだぞ、

お前のケツの穴が

裂けてもな」

「ううっ……」

ルアンヌは力を緩め、

受け入れる体勢をとる。

ヌキ
ヌキ

ヌキ……

いつのまにかギスランのいいなりとなり、
それを自然と受け入れている自分に
まだ気づいていないのだった。

「……くそ、……くそおっ！」
「ふっふっふ、そう泣くな。
じぎによくなってくるさ」

アッポ

アッポ

ルアンヌは内臓を掻き回される感覚に必死に耐える。



「おおっ！だんだんほぐれてきたな。

根元まで入るかもしれん」

「や、やだっ…、やめっ…!!」

はぐっ!!」

ギスランの肉棒が

深々と刺し貫く。

嘔吐感が腹の底から

湧き上がる。

グググ

吐き気の中にかすかに性感を認め、ルアンヌはそれに縋りつく。

「おぐっ!!」

なかなか締め付けるじゃないか」



「そんなに欲しいか？
じゃあ受け取れっ!!」
「はぐうううっ!!」

ビュ
ユル
ルッ

ドク

ドク

ドク

ギスランは欲望をトクトクとルアンヌの菊門のなかにぶちまけた。

「初めてにしてはやるじゃないか。
これからケツの穴も
可愛がってやるからな」
「うう…」

吐き気を堪えるルアンヌに
ギスランは残酷な宣言をする。
事実、これ以降ギスランはルアンヌの尻穴に執着し、
欲望のはけ口とした。



また数日後。

「…んう」

ギシ

ギシ

ギシ

「感じてるのかいルアンヌちゃん！
でもまさか直接やれるようになるとはな！
ギスランの大将さまさまだぜ！」
ルアンヌは今、地下の一室でギスラン配下の兵の一人に抱かれている。

全ての枷は外され、体は自由に動かすことができるようになっていた。
重い鎧も外し、身軽な状態である。

しかし、逃げ出すわけにはいかない。

「痛くないかい」

「ルアンヌちゃん」

「…ん、大丈夫だ。そのまま使ってくれ。私の尻を」

「へへへ！」

ルアンヌはギスランから兵の性欲処理を
体を使って行うよう命じられていた。二つ目の条件だ。

「ああ！アナルってのもいいもんだな！

でもルアンヌちゃんのおまんこも味わってみたいぜ！」

「駄目だ…、んっ！ギスランの…許可が出ていない…。

私の尻穴じゃ

不満か…？」

「全然！」

ギスランは兵の性欲処理を主に尻穴でおくよう指示していた。
前の穴が使えるのは功績をあげたものか
ギスランが許可したものに限られた。

「ルアンヌちゃん！締め付けてくれっ！」

「…どうか？」

「ううっ！もう出そうっ!!」

ギシ

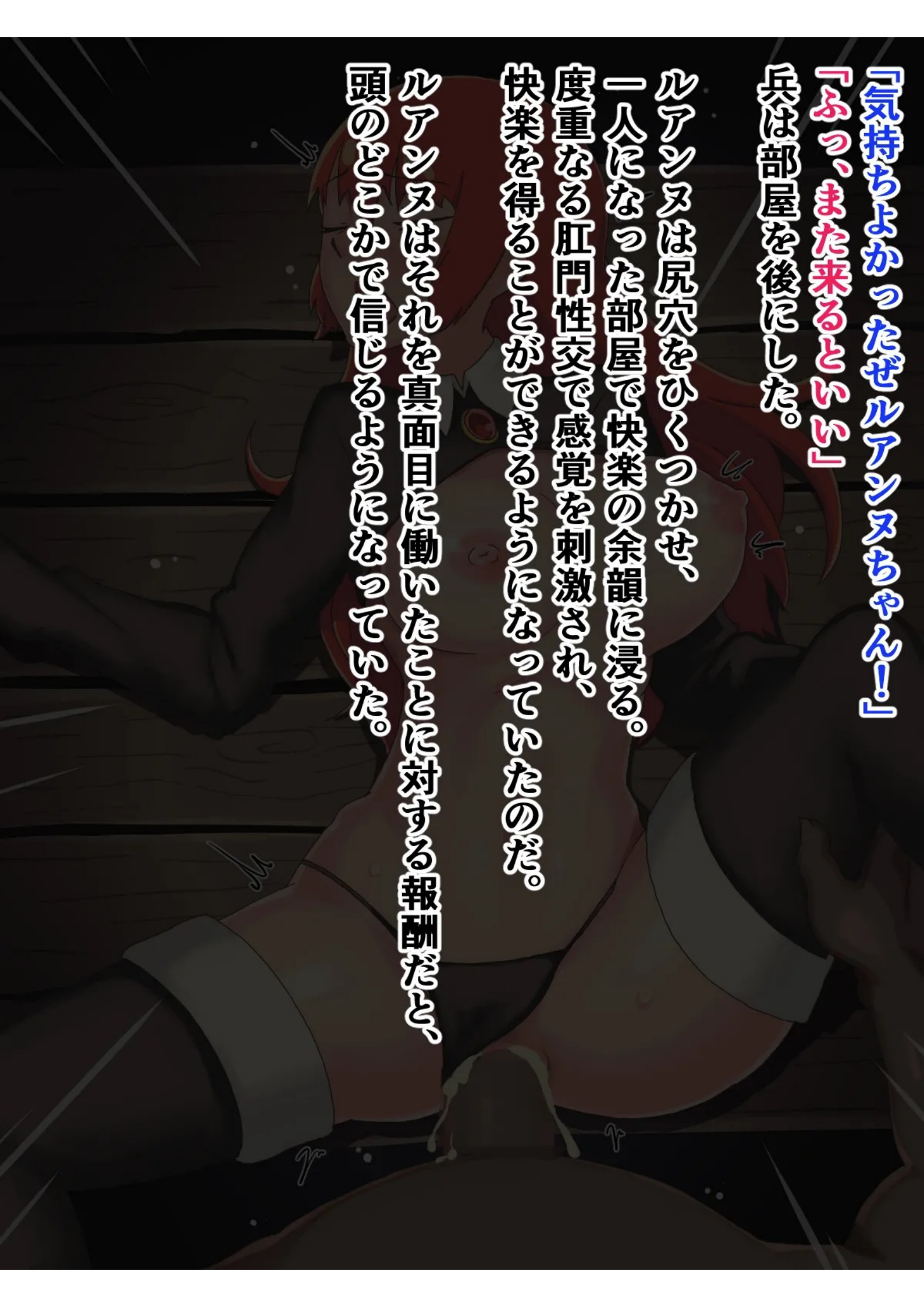
ギシ

キョッ



ギシ

男に抱かれることにも慣れ、
こういった要求に対応することも出来るようになっていた。
ギスランの命令は屈辱的ではあったが、
ルアンヌは生来の生真面目さでこなす。
（熱いものが…来るっ！）



「気持ちよかったぜルアンヌちゃん！」
「ふっ、また来るといい」
兵は部屋を後にした。

ルアンヌは尻穴をひくつかせ、
一人になった部屋で快楽の余韻に浸る。
度重なる肛門性交で感覚を刺激され、
快楽を得ることができるようになっていたのだ。

ルアンヌはそれを真面目に働いたことに対する報酬だと、
頭のどこかで信じるようになっていた。

ある日の朝、ギスランに呼びつけられたルアンヌ。
服を渡され、着替えるよう命令される。

「…この格好でいろと?」

「そうだ。」

その格好でいる限り、岩内を自由に歩くことを許可する」



「貴様の服も破れたりほつれたりしていたからな。

わざわざ仕立て直してやったのだ」

「衣服として機能してないようだが……」

「何を言う。」

「男の劣情を誘ういい姿ではないか」

「……」

ギスランの視線に晒され、ルアンヌは体をよじる。

普段犯されている時とは別の、また違った恥ずかしさを感じていた。





ルアンヌは自分の今の格好を改めて見る。

布地は少なく、胸部に至っては完全に露出してらる。

鎧はもともと捕まっていた時に身に着けていたものだ。

しかし、戦場で命を預けていた鎧を

男の歡心を買うための小道具にされるのは

ギスランに従うことに慣れた今でもやはり悔しいものがあった。

「その格好で俺の部下たちの無聊を慰めるのだ。

最近戦がなくて暇だからな。

よし、これを3つ目の責めとしよう。」

「……」

岩内での自由を許され、真っ先にしたことは

クロエの安否の確認だった。

しかし、どうやら別棟に連れていかれたようで、

会うことはできなかつた。

その日の昼。

「こっちも頼むぜ
ルアンヌ！」
「ま、待て、一人ずつ…！」
「こんなに並んでんだぜ！
待てねえよ！」



暇を持って余した兵たちが
ルアンヌに群がる。

ギスランの部屋から
でてしばらくは自由に出歩けたが、
朝の話の噂が広がるにつれ身動きが取れなくなっていた。



「わ、わかった、逃げないから……!!」
「へへへ、よろしく頼むぜ!」

興奮し素っ裸になった兵が口々に騒ぐ。
地下で兵たちの相手を一人ずつ行っていた時より体力的に過酷だ。



部屋一杯に兵たちが集まり、熱気と臭気が充満する。

ルアンヌは手近な兵に対応するので精一杯だ。
捕まってから数週間で覚えた手管を必死になって振るう。



「いつになく積極的だなあ？女騎士さん」
「べ、別に…」

シユッ

シユッ

「俺たちとやるのが楽しくなってきたのかあ？」
「そういうわけではないっ！」



「ビビビ！」

いつになく頑張ってるから協力してやるぜ！」
そういつた兵が自ら腰を振り始める。

シュツ

シュツ

ズンツ

「俺も俺も！
一緒に射精しようぜ！」

「俺にかけんなよ！」

「勝ってにしろっ！」

ズンツ

ズンツ





「おおおおっ！」

「ぐっ……！」

「でるっっ！！」

トビ
ジュン

トビ
ジュン

トビ
ジュン

「はあっ♡♡」

「ハアハア…、出したか？
それでは次のものとさっさと変われ…」
「つれないなあ…」

3人を同時に
処理したルアンヌだったが、
期待に胸を膨らませた男たちが
まだまだ部屋を占有しているのだった。



岩内を半裸のルアンヌが闊歩するのが、
日常の風景となったところ。

ルアンヌは一人の若い兵に声をかける。

「お前は？ 見ない顔だが」

「は、はいっ！」

自分は先日着任したばかりの新兵ですっ！
緊張気味に一気に捲し立てた新兵は
ルアンヌから視線を逸らす。

その様子を見てルアンヌはニヤリと笑う。

「私が何者か気になるようだな？」

「え、ええ……」

「私は捕虜だ。お前たちに捕らえられた哀れな、な」
「はあ……」

そういうとルアンヌは新兵の手を取り、
自分の乳房を掴ませた。

「あ、あのっ!?!」

「兵の慰安を対価に自由に出歩くことを許可されている。この体を使ってお前たちの無聊を慰めているんだ。お前もたまっているんじゃないのか?」

「い!?!、え、え〜と…」

「ふふふ、来い」

「え?えっ!?!」

ルアンヌは新兵の手を引き、砦の二室に連れ込んだ。

「はああ♡

どうだ？お前の肉棒はすっかり私の尻穴の中だ」

「はいっ！きつくて…

きついけどあったかいですっ」

ズブズブ…

ルアンヌは連れ込んだ一室で新兵を裸にし押し倒していた。

「私が動いてやる。」

「お前はじっとしてていらいぞ」

「はいっ」

ユツサ

ユツサ

ルアンヌは新兵の体の上で自ら腰を振る。
その様は丸太にまたがって一人で自慰をしているかのようにだった。



「あのっ！俺、もう……！」

「はやすぎるー！」

ルアンヌは新兵を叱りつける。

「まだ我慢できるだろうか？」

私が許可するまで出すんじゃないぞ」

「が、頑張りますっ！」

ユツサ

ユツサ



「あっ♡はあ…♡
いいぞ…硬くて太いいチンポだ…。
尻穴で孕んでしまいそうだ…♡」

ギッ

シ

ユッ

サ

ユッ

サ

新兵の様子も気にせず、ルアンヌはうわごとのようなにつぶやく。
その腰使いもだんだん荒っぽくなっている。

「また貯まったら私の尻穴を使え。

遠慮するんじゃないぞ♡」

「はいっ!!」

一部始終を偶然見ていたギスランは、

半ば呆れ、半ば感心していた。

ルアンヌの生真面目な性分が、

現状にこのような適応をしたのだろう。

ルアンヌは男たちの欲望をその身で受け、

処理することによってすっかり慣れてきている。

ギスランは頭の中で練っていた計画を次の段階へうつすことにした。

岩の一番地下深くの薄暗い一室。
ルアンヌは再び拘束されていた。

「誰か…誰かつ…！」

ルアンヌの呻くような呟きは誰の耳にも届かない。

ギスランはいつものように兵たちの性欲処理に励んでいたルアンヌを、突然に、唐突に、牢にぶち込んだ。

ルアンヌには理由がわからない。

勝者と捕虜という間柄ではあったが

最近では良好な関係を築きつつあったのだ。

ルアンヌがこの独房に捕らえられて以来、

人と関われるのは食事と用便の世話に来る兵だけだった。

しかし、その兵に語り掛けても、

まるで聞こえていないかのように無視をされた。

寂しさとともに、狂おしい疼きが体の奥でくすぶっている。慰めてみようにも手足をあまり動かさせない様拘束されているため、それは不可能だった。

捕虜となる前なら耐えられたかもしれない。

しかし、捕えられ散々体に雌の悦びを教え込まれた今では、抗いがたい内罰となつて自身を責めさいなむのだった。

「…お願い…誰か…」

誰か…来て…!」

ルアンヌは今日何度目か分からない独り言をかすれた声でつぶやくのだった。

獄につながれ、何日経ったか分からなくなった頃。

「ルアンヌ、釈放だ」

入ってきた兵が、そう言いつつルアンヌの枷を外す。

そして井戸近くまで連れて行った後、冷水でぞんざいに身を洗った。

「大将に会いに行け」

ルアンヌの表情が明るくなる。

独房に入れられた理由も釈放された理由もわからないが、

とにかく許されたのだ。

ヨタヨタとギスランの部屋へ向かって歩き出す。

長い間同じ姿勢でいたため体が若干軋むが、

露ほどの苦痛も感じなかった。

ギスランの部屋は岩の上階だ。
長い階段を壁に捕まりながら登る。

ルアンヌの耳に話し声が聞こえてくる。

「…れ」「…はい、…様…」

男の声と女の声だ。

男の声はギスランだとすぐわかった。

女のほうは…

「クロエ?」

ギスランの部屋へ近づくとつれ、
会話が明瞭に聞き取れるようになる。

「…ららぞ」「…んぷ♡…スラン様あ♡」

ギスランはいつもの調子だが、

クロエはルアンヌの聞いたことのない媚びるような声を出していた。
部屋で何をしているかは明白だ。

手を出さないという話だったので？
ルアンヌの頭に血が上る。

体に鞭打ち、階段を一気に駆け上った。

ダンツとルアンヌは
勢いよくドアを開ける。
その目に飛び込んできた光景は、
クロエが喜々として
ギスランの肉棒を
愛撫する後ろ姿だった。

「クロエ…!」

「…許せないっ!!」

「…お姉さま?」

ルアンヌはツカツカと歩み寄り、そして…



クロエを押しつけ、ギスランの股座にかしづく。

「…ギスランッ！」

…いえ、ギスラン様っ!!

わたし、私を…

私を抱いてえっっ!!」

ルアンヌは狂乱したかのように叫ぶ。

いや、確かにおかしくなっているのだろう。

薄暗い地下室に監禁され、長いこと放置されていたのだ。

ギスランは口の端を吊り上げニヤリと笑った。

「お姉さま…」

クロエはルアンヌを心配して声をかける。

ルアンヌが地下室に閉じ込められていた間、

ギスランに屈し調教されていたクロエだったが

その理性まで失っているわけではない。

義姉の尋常ならざる様子を純粹に心配したのだ。

対するルアンヌは、

「私…」

私がつっ…!!

私がギスラン様の女なのおっつ!!」

ルアンヌはクロエに向かって叫ぶ。

どこか幼さを感じさせる調子だ。

一瞬、クロエは悲しい表情をしたが、

優しい口調でルアンヌに語り掛ける。

「わかりました…」。

じゃあお姉さま、私はわきに寄っています。

ギスラン様にいっぱい可愛がってもらってくださいなね」

「うん！」

ルアンヌは満面の笑みで返事をした。

「…で、どうするんだ？」

今まで黙っていたギスランが口を開く。

「わ、私のおっぱいでギスラン様のおちんちんに奉仕します」
そういうとルアンヌは自らの乳房でギスランの肉棒を包み込んだ。



「ほう」

「い、いひっ…!!」

クロエのよりおっぎらでしよう♡」

ルアンヌはどこかクロエに対抗意識を燃やしているようだ。
もっとも、岩内にいる二人の女の
もう片方だからというだけかもしれないが。

ルアンヌは恍惚の表情を浮かべながら
ギスランの肉棒を扱く。

「はああ♡

いかがですか、ルアンヌのおっぱい♡」

「ふん、まあまあだな」

「嬉しい♡」

ギスランの適当な返事を、

ルアンヌは大げさに褒め言葉だと受け取る。

やはりどこかおかしくなっているのだろう。



ルアンヌは胸で愛撫しながら涎を垂らさんばかりの表情でギスランの肉棒を見つめている。

「よし、いいぞ。」

「貴様の穴にこいつをぶち込んでやる」

「ああっ♡」

「ありがとうございますっ♡」

「このままだと噛みつかれそうだからな」



「久しぶりのちんぽ
おちんぽお♡♡」

犯してもらえると聞いたルアンヌが、
素早く立ち上がりギスランに跨る。

ツブッ

「あっ？コラッ！
何を勝手なことを
している！」



突然のことに驚いたギスランだが、
もちろんギスランは勝手は許さない。

「止まれッ!!」

「そんなあ…」

ピタッ

ググ…

ギスランの命令にルアヌは
媚びた切なげな声を出す。
しかしギスランの亀頭は
ルアヌの体内に
飲み込まれている。

「また地下牢にぶち込まれたいかり!!」

「いっ、いやっ…それはいやっ…!!」

そのままの姿勢で静止するルアンヌ。

足腰の萎えているルアンヌにはつらい体勢だ。

プル
プル…

「いいか、そのままです。

根元まで挿れることは許さん」

「は、はいっ!!」

「ふーっ……ふーっ……」

おあずけを喰らって荒い息を吐くルアンヌ。
少しでも快楽を得ようと体を微妙に振る。

プル
プル……

「まだまだ……まだまだぞ……！」
一方のギスランにも
汗がにじみ出ていた。



「…よし、いい子だ。
今から3つ数える。」

「0まで数えたら挿入を許してやる」
「はいいいっ♡」

プルプル

ハグハグ

「3…」
「2…」
「1…」
「5…♡」

力が抜けたルアンヌはギスランのほうへ倒れ込む。

「おい、だらしないぞルアンヌ。

クロエツ」

「はい」

「ケツの穴を締めてやれ」

「はい」

「ひぐっっ?!」

クロエの指がルアンヌの尻穴に伸びる。

その感覚に
驚いたルアンヌは
腰を浮かす。

ビクッ!!

「情けないですねお姉さま。
ここがそんなに好きですか?」

ルアンヌの様子を見てクロエの嗜虐心に
火が付いたようだ。
普段なら絶対しない口の利き方だ。



細い指がルアンヌのすぼまりをこねくり回す。

「はうらっ!!」

ひっ!

やめ、

やめてっ!!」

ググニ
ググニ

「駄目ですよお姉さま。

ギスラン様の命令です」

「ふふっ、そうだぞルアンヌ。

腰を動かせ」

「はいっ!!」



「あふっ、あっ♡
ああっっ♡♡♡」

ルアンヌが腰を
動かし始めても
クロエの指は
尻穴から
離れない。

クロエの指が伸び遠慮なく
ルアンヌの奥まで犯し始める。

「ふふふ、お姉さまのそんな表情初めて見ました♡
こんなお顔もなさるのですね♡」



「うー…あああ、ああっ♡」

ルアンヌの口は
だらしなく弛緩し、
言葉も発せられ
なくなっている。

(お姉さま…)

クロエの内心は複雑だ。
以前、凜々しい兄の許嫁に、
同姓ながら恋に似た感情を抱いたことがある。
そのルアンヌが、雌の顔をさらし
よがり狂っているのだ。



クロエは指に力を籠め、
強く肛門の内部を刺激した。

「ふぁっ!!♡」

ルアンヌは
痙攣する。

腰が抜けそうに
なっているようだ。

パッ

ググググ

パッ


バッ

「ふっ、そろそろ限界のようだな。
いいだろう。」

「たっぷり仕込んでやるっ!」

「はっはっはっ♡♡」





ルアンヌの体は絶頂により海老ぞった後、
蛸のように力を失った。

長い牢生活のためか体力の限界だったのだ。

膣内にはギスランの肉棒が刺さったまま、

ドクドクと精液を流し込んでいる。

ルアンヌはギスランの胸に倒れ込む。

（ギスラン様ア…♡）

ルアンヌの意識はそのまま

まどろみの中に落ちていった。

数か月後。

軍を率いたギスランはカサル公国の城塞を次々と落とし、ついには都の目前まで迫っていた。

ルアンヌの許嫁レオナールは国中の兵を掻き集め、都の西に陣を敷きギスランと対峙している。

レオナールの額に汗が流れる。

敵兵の数は自軍の倍。

しかもこれまでの戦勝で乗りに乗った勢いだ。

しかし、負けるわけにはいかない。

ここで負ければ国は落ちるだろう。

この戦に勝ち、さらには敵国まで攻め入って、

行方をくりました妹と許嫁の安否を

確かめなければならぬ。

ギスラン軍との睨みあいには、もう2日となる。

兵達も士気は保っているが

疲れが見え始めていた。

「伝令！伝令！」

「どうした」

伝令役の騎士が駆け込み、レオナールのもとに跪く。

レオノールは先を促す。

「敵軍から騎馬が進み出て、

わが軍を挑発するように練り歩いております！」

「捨て置け」

「それが…」

伝令が口ごもる。

何か言いにくいことがあるようだ。

「もういい、自分で確認する！」

歯切れの悪い伝令に業を煮やしたレオノールは、

兵を掻き分け前線に移動する。

その目に飛び込んできたのは…

「ルアンヌ！」

レオノールは大声で叫ぶ。

行方不明だった許嫁が馬に乗っていた。

五体満足で怪我をした様子もない。

しかし、それを素直に喜べないのは…

「あれがルアンヌ様…?」

「ほとんど裸じゃねえか…」

娼婦でもしねえぜ、あんな格好…」

兵が回々につぶやく。

「しかも見る!」

腹が膨らんでねえか?

敵方に孕まされたのか!」

兵達の困惑する声がさざ波のように陣に広がる。

レオノールはしばらく啞然としていた。

我に返ったレオノールは乗馬に鞭をくれ、

ルアンヌに駆け寄る。

ルアンヌはレオノールに目を向ける。

しかし、その目はどこか虚ろだ。

正気のように思えない。

「ルアンヌ!!」

私だ!レオナルだ!!

お前の許嫁のっ…!」

心配し駆け寄ったレオノール。

しかし、ルアンヌは腰の剣に手をかけ、そして…

「グゲッ!」

一閃。

ルアンヌの白刃は許嫁の首を胴体から切り離した。ルアンヌの唇が喜色に歪む。

ルアンヌは許嫁の首を掴み、

高々と掲げながら後ろを振り返った。

「ギスラン様アツ!」

ルアンヌはやりました!

憎き敵を一刀のもとに切り伏せたのですっ!

褒美を!ご褒美をツ!!

卑しいわたくしの尻穴めに

熱い子種を注ぎ込んでくださいませッ!」

カサル公軍に動揺が広がった。

自軍の大将が討たれた。

しかも許嫁にだ。

その許嫁は大将の首を振り回し、

媚びた声音で後ろに向かって卑猥な言葉を

回走っている。

異様な光景にカサル公軍は恐慌をきたした。

戦列は崩れ、すでに逃走を図っているものまでいる。

ギスランは軍を進める。

ほぼ戦らしい戦もなしに、

その日のうちにカサル公国の都は

ギスランの手に落ちた。

カサル公国宮殿の寢室。
ルアンヌとギスラン、
それにクロエと幾人かの男女は、
贅を凝らしたその寢室で体を重ねていた。

主人であるカサル公はいない。
かつての主は縄で縛られ、
地下牢に放り込まれたのだ。



「ギスランさまあ♡
私にも、クロエにも
子種を下さいまし♡」
「俺じゃ不満か。」
へっへっへ」

ギスラン第一の配下が
クロエの尻を犯している。

「あーん♡ギスラン様あ♡
私だけ見てえ♡よそ見しないでえ♡」
ルアンヌの相手はギスランだ。
ルアンヌの腹は大きく膨らみ、子を宿していた。



「そうはいってもな。
貴様はもう
妊娠してるじゃないか。
まだ子種が
欲しいのか？」

「無駄には致しません♡

注いでもらった精子で

もう一人孕んでおみせしますわ♡

孕んでもなお、その性欲は増しているようだ。





「浮気もんの
お前さんにや
俺の濃厚男汁を
おみまいしてやるぜっ」
「ひゃっ！」
んはああああんっ♡♡♡

クロエの膣内に男が汚汁をぶちまける。
この日何度目かもしれない中出しだ。

パッパッ

ドグドグ
ドグドグ
ドグドグ

「ギスラン様っ！
私も♡
わたしもおっ♡♡」
その様子を見ていた
ルアンヌは
ギスランに
ザーメンをねだる。

「ほっほっほー！
そうせかすな！」



「いつみても、いい乱れっぷりだ。
中の赤子が精液で溺れるかもな」
ギスランがルアンヌの腹に精を放ちながら、
たちの悪い冗談を飛ばす。

「大丈夫ですよお♡

私の子ですもの♡

きつとザーメン好きの淫乱な女の子ですわ♡♡」
ルアンヌの頭の中では、

腹の赤ん坊は女と決まっているようだ。

成長した娘とともに親子並んで

ギスランに犯されることを夢想している。

ギスランの責め苦を受けて以来、
ルアンヌはおかしくなっていた。

馬上で剣を振るい、敵を屠る誇り高い女騎士。

それが敵に捕まり辱められ

長期にわたって凌辱されたのだ。

男たちの欲望のはけ口にされている現実には、

生真面目なところのあるルアンヌは無理に順応した。

結果、心は壊れ、精神に異常をきたす。

ただその狂った頭でたしかに幸福を

感じているのだった。













































































































































